

尾形乾山

江戸時代中期に活躍した陶工、絵師。京都の裕福な呉服商の家に生まれ、6歳年上の兄は琳派の大成者・尾形光琳。兄と同様、幼い頃より本阿弥光悦や俵屋宗達の作品を見て育った。父の死後、膨大な遺産を兄の光琳と折半で譲り受けた。派手好きで浪費家の兄・光琳とは対照的で、禅や学問を好み、内省的な性格で地味な生活を送り、御室仁和寺前の山荘に若くして隠居した。1689年頃に御室仁和寺の御室窯にいた著名な陶工・野々村仁清から陶芸を学ぶ。1699年37歳のとき、京の鳴滝に窯を開く。1712年、二条丁子屋町に移り、独自の意匠による食器類を創作し、乾山焼として広く知られるようになる。後に、江戸に移り住み晩年には絵画制作にも力を入れ、弟子を通して江戸琳派の基礎をつくった。